

ハイライフデータファイル2010／新シリーズ連載 **第二回**
都市生活に大きな変化が起こっている
第2回 ストレスたまる現在の都市生活

2010年12月22日



- 執筆: マーケット・プレイス・オフィス代表 立澤芳男(たつざわよしお)
- 流通系企業の出店リサーチ・店舗コンセプトの企画立案／都市・消費・世代に関するマーケティングの情報収集と分析
- 現ハイライフ研究所主任研究員・クレディセゾンアドバイザー
- 元「アクロス」編集長(パルコ)／著書「百万人の時代」(高木書房)ほか

ハイライフ研究所が実施した「都市生活の意識と実態に関するアンケート調査」(2010年10月実施)の調査結果を元に、既存データも活用し現在の生活者の生活価値観や生活行動の実際を見ます。

生活者の価値観や生活行動は、収入の高低、子供の有無、家族の多少、ローンの有無、若年層の未既婚、高齢者介護の有無、居住地などなどによって大きく異なり多種多様です。従ってかつてのように、例えば標準家族世帯を基本軸とする生活者の平均的な価値観や画一的生活行動を認識することはできません。

多様な生活価値観や生活行動が拡大する中で現実の社会は動いています。

新連載シリーズ第二回は、日本の社会の現状に対する都市生活者の価値観についてのレポートです。第一回は「プロローグー多様化した生活価値観と生活行動ー」というタイトルで11月に発信済みです。

(*なお今回は、アンケートが「性別・年齢別」で集計されたものを利用した。次回以降は、所得別や世帯構成別などを軸にして「実際の生活行動」(ショッピングや趣味活動)についてレポートする。)

◆調査サンプル(計1800)／男女別・男女年齢別			
男性 計	906	女性 計	894
男性 13~19歳	72	女性 13~19歳	68
男性 20~34歳	244	女性 20~34歳	227
男性 35~49歳	246	女性 35~49歳	243
男性 50~64歳	232	女性 50~64歳	246
男性 65~74歳	112	女性 65~74歳	110

目次

I・現在の生活実感ーp.2

1. 現在の生活満足度
2. 現在の幸せ感・幸福感(理想)
3. 現在の生活水準

II・日常生活での悩みや不安ーp.5

1. ストレスを感じる程度
2. ストレスの原因や心配事

III・経済的なゆとりについてーp.9

1. 経済的なゆとり
2. 収入満足度
3. 収入と支出のバランス
4. 今後の収入の増減

IV・現在の日本社会についてーp.12

1. 現在の「社会」の満足度
2. 今の社会は(MA)は

特別アンケート調査

ポイントⅠ 子供手当の使い道は? P.13

ポイントⅡ エコポイントは誰が利用? p.14

新連載シリーズ 第二回

現在の生活の満足度／現代生活者のストレス／日本の現状認識／不安は何なのか

日本人の生活実感—すっかり変わった生活価値観と生活行動—

この不景気感漂う中、株価や企業業績が上昇する割には相変わらず月給やボーナスの支給額・率は伸びない。大卒の内定率も史上最悪というご時世である。いま、時代劇「武士の家計簿」（12月4日全国公開）が話題を呼んでいる。ぜいたくとは無縁の「清貧生活」を送った御算用者（ごさんようもの）（会計処理の専門家）の生活を描いたもの。「城に勤める武士の力の源は家庭。今見失われている家族の力を描きたかった」と監督の森田は言う。

現在の日本の生活者は、デフレ社会下で強いられる生活にどう見切りをつけ、どう生活防衛に走ろうとしているのか。

I. 現在の生活実感

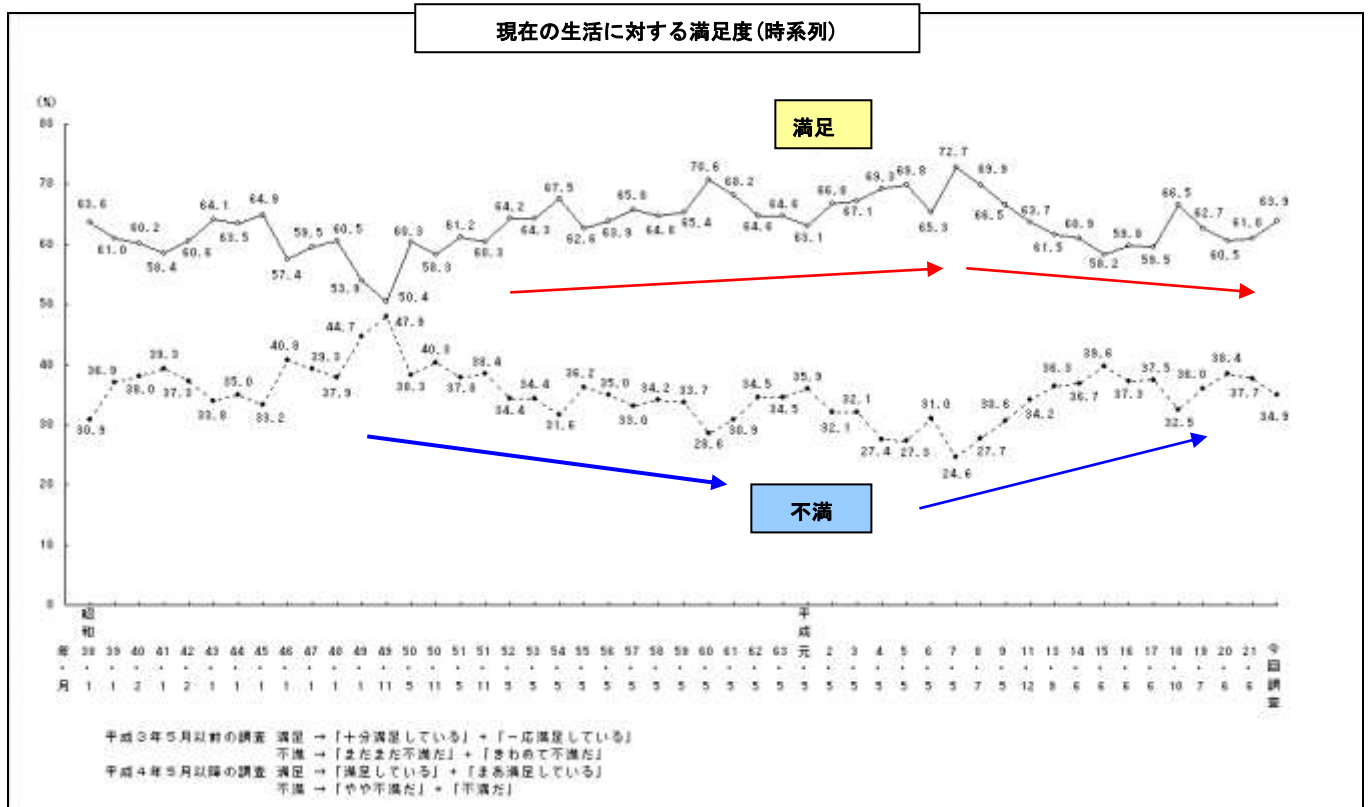
「不満」とする者の割合が高いのは、30歳代～50歳代の男性と50歳代の女性

1. 現在の生活満足度 現役世代と高齢者世代とに大きなギャップ！

- ・全体として、現在の生活にどの程度満足しているか聞いたところ、「満足」とする者の割合17.8%、やや満足（58.4%）を加えると、満足度は74.2%になる。「不満」とするものと「やや不満」を加えた不満度は25.8%となる。この種のアンケートの回答ビヘイビアとして、不満とする人は積極的に回答する傾向があり、満足度70%台は決して高くはない。むしろ不満度が全体の4分の一を占めることに眼を向けるべきだろう。
- ・性・年齢別に見ると、「満足」とする者の割合は男性の65歳以上、女性の65歳以上で20%を超えている。「やや不満」とする者の割合は男性の20歳代から64歳までと女性の30歳代から64歳までが20%台を超えている。社会を支える現役世代と高齢者層との満足・不満度のギャップは好対照だ。

1. 現在の生活満足度					
	調査数	満足	やや満足	やや不満	不満
TOTAL	1800	17.8	56.4	21.7	4.1
男性 計	906	18.2	52.3	24.1	5.4
女性 計	894	17.4	60.6	19.2	2.7
男性 20～34 歳	244	18.0	50.0	27.0	4.9
男性 35～49 歳	246	15.0	50.8	27.6	6.5
男性 50～64 歳	232	15.9	53.9	24.6	5.6
男性 65～74 歳	112	22.3	56.3	16.1	5.4
女性 20～34 歳	227	12.3	64.8	18.9	4.0
女性 35～49 歳	243	13.6	60.9	21.8	3.7
女性 50～64 歳	246	15.4	59.3	23.2	2.0
女性 65～74 歳	110	28.2	61.8	10.0	0.0

- ・ 生活の満足度を長期的に調査したデータが内閣府の「国民生活調査」で発表されているが、それを見ると、平成時代に入るまで不満は下がり続けたが、平成バブル以降今日まで上昇し、高位水準のまま推移している。



2. 現在の幸せ感・幸福感(100点満点) 理想に比べ現在の幸せ点は平均 70.5 点。男性は 70 点以下！

- ・現在の生活にどの程度満足しているか聞いたところ約 25%の人が不満を持っていることがわかったが、同様のことを「現在の幸せ感・幸福感は何点？」(理想点を 100 点)と質問した。トータル 1800 サンプルの平均点は「70.5 点」となった。学校の成績で言えば落第点(60 点)を少し上回った状態にある。
- ・性・年齢別にその「現在の幸せ感・幸福感」の点数を見ると、女性は 72.5 点、男性は 68.4 点となり女性が男性を上回った。一番の高得点は「女性 65～74 歳」の 76.5 点、最低点は「男性 20～34 歳」で 64.9 点となり平均点を大きく下回る。高齢化するほど「現在の幸せ感・幸福感」の点数は高まる。当然といえば当然の結果がでた。

2. 現在の幸せ感・幸福感(理想=100点満点)			
平均(点) 70.5 点			
男性 計	68.4	女性 計	72.6
男性 20～34 歳	64.9	女性 20～34 歳	70.6
男性 35～49 歳	67.8	女性 35～49 歳	72.4
男性 50～64 歳	69.3	女性 50～64 歳	72.8
男性 65～74 歳	72.4	女性 65～74 歳	76.5

3. **現在の生活水準** 「中の中」が53.2%、「中の下」(24.1)が「中の上」(18.2%)を大きく上回る！

・生活の程度は、世間一般からみて、どうか聞いたところ、「上」と答えた者の割合が1.3%、「下」は3.2%となっている。国の調査では上が0.8%、下が6.3%となっており、若干ではあるがアンケート回答者（都市生活者／サンプル1800）の生活程度がやや上であることがわかる。

・生活の程度を

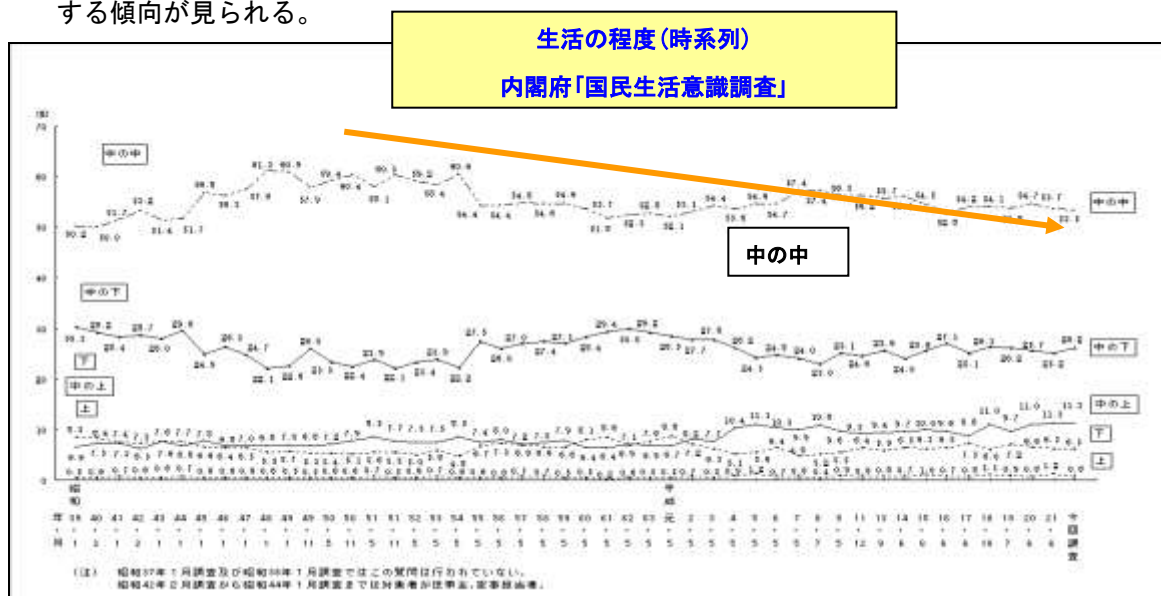
「性・年齢別」に見ると、「中の下」や「下」の程度のレベルで大きな較差がある。特に「男性20～34歳」では「下」が7.0%とダントツに高いが「中の上」でも20.1%になるなど、ヤングアダルト層の中で生活格差が顕在化し

3. 現在の生活水準					
	上	中の上	中の中	中の下	下
TOTAL	1.3	18.2	53.2	24.1	3.2
男性 計	1.4	18.2	49.0	26.8	4.5
女性 計	1.2	18.1	57.4	21.4	1.9
男性 20～34 歳	0.8	20.1	48.8	23.4	7.0
男性 35～49 歳	0.0	15.4	50.4	30.9	3.3
男性 50～64 歳	1.3	17.2	47.8	28.9	4.7
男性 65～74 歳	0.9	14.3	54.5	25.9	4.5
女性 20～34 歳	0.9	15.0	56.8	25.1	2.2
女性 35～49 歳	0.8	14.8	59.3	23.0	2.1
女性 50～64 歳	0.4	17.5	58.1	21.5	2.4
女性 65～74 歳	0.9	21.8	56.4	20.0	0.9

ていることが伺える。また、「中の下」での割合が「男性35～49歳」が30.9%とダントツに高くこの年齢と他の年齢層との違いが大きいことがわかる。

・高齢者層（65～74歳）を見ると、「中の上」とする割合が、男性14.3%に対し女性は21.8%と大きく上回る。この調査は[気分や感じ]が回答のビヘイビアにあるようで、「楽観的な女性」、「悲観的な男性」の違いがあるように見受けられる。

・国民生活調査のデータから「生活程度」の長期トレンドを見ると、平成22年度は「中の中」(53.5)で本調査とほとんど変わらないが、昭和50年代の「総中流社会（中の中が60%台）」が少しずつ崩れはじめていることと平成年代になって「中の下」が若干増え、また、「下」とするものが増加する傾向が見られる。



Ⅱ. 日常生活での悩みや不安

日頃の生活の中で、悩みや不安を何に感じているのか。多様で複雑にたまるストレス

日本は90年代に入って、経済の長期停滞化や労働市場の流動化といった要因が複合的に絡み合い、ワーキングプアに代表される低賃金労働者が増え、リストラなどで職を失う労働者が続出した上、「就職氷河期世代」と呼ばれる世代は就職活動において正規雇用として職を得ることが困難となっている。現在の収入や所得、さらに将来の見通しの悪さ、さらに少子高齢化など「世帯」の基礎的基盤が崩れる中、生活者の日常生活下の悩みや不安は多様となって一律的では無く複雑なものとなっている。

インターネットの進化、仕事のグローバル化などの要素も加わり、今だかつてない新しい種類の悩みや不安が生じ、ストレスがたまり続けている。

1. **ストレスを感じる程度** 約7割の人がストレスを感じている。年齢世代で大きな差異がある！

・「ストレスを感じている」と答えた者の割合が63.6%（「よく感じる」20.8%プラス「時々感じる」42.8%）、「感じていない」（「たまに感じる」30.3%プラス「ほとんど感じない」6.0%）と答えた者の割合が36.3%となった。

・性・年齢別に見ると、「ストレスをよく感じる」で高い割合を見せたのは、「男性35～49歳」（31.3%）、「女性20～34歳」（30.4%）である。いずれも30%台と他の年齢層を大きく上回る。仕事に追いまくられる現役中心世代である。

・「ほとんどストレスを感じない」の回答率が高かったのは、「男性65～74歳」（12.5%）、「女性65～74歳」（16.4%）である。

・ストレス解消の対処が難しいと思われる「時々感じる」で高い割合を示したのが、若者の「男性13～19歳」（48.5%）と中高年女性の「女性50～64歳」（48.8%）である。両世代とも生活が変わるあるいは変えなければいけない世代である。

・前述した「生活満足度」においては、男性よりも女性がいくらか高いものの、ここ（「ストレスを感じる程度」）ではほぼ同じかやや上回っている。女性は男性よりも実生活を素直に受け止めていることのあらわかもしれない。

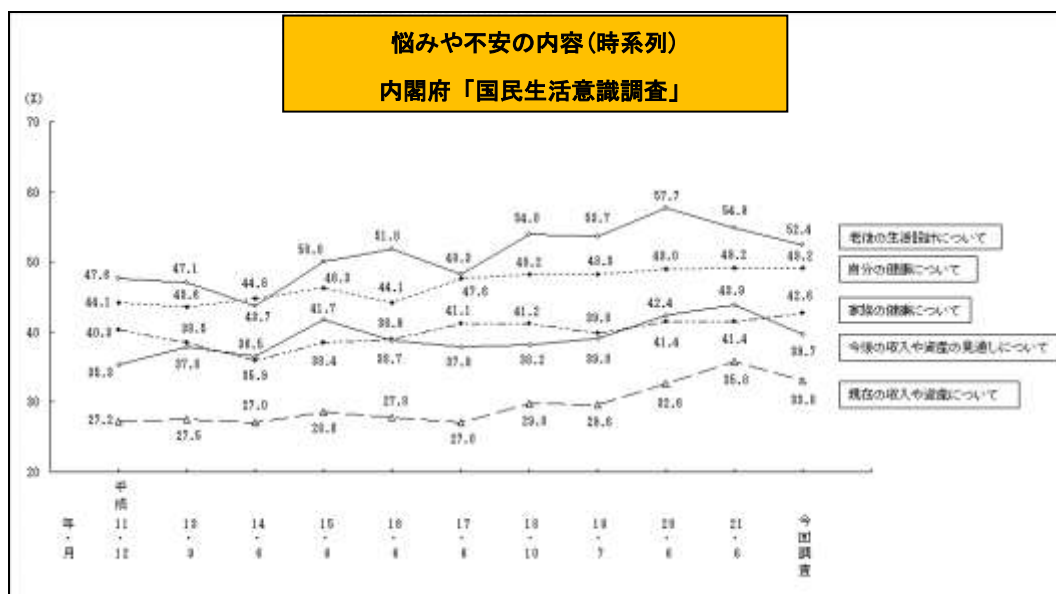
1. ストレスを感じる程度				
	よく感じる	時々感じる	たまに感じる	(殆ど)感じない
男性 計	20.8	42.8	30.3	6.0
男性 13～19 歳	11.1	48.6	34.7	5.6
男性 20～34 歳	20.9	43.0	31.6	4.5
男性 35～49 歳	31.3	34.6	28.0	6.1
男性 50～64 歳	16.4	40.9	35.3	7.3
男性 65～74 歳	5.4	32.1	50.0	12.5
女性 計	21.0	44.5	28.6	5.8
女性 13～19 歳	23.5	44.1	26.5	5.9
女性 20～34 歳	30.4	45.8	20.7	3.1
女性 35～49 歳	23.5	45.7	25.9	4.9
女性 50～64 歳	14.6	48.0	32.9	4.5
女性 65～74 歳	9.1	31.8	42.7	16.4

2. ストレスの原因や心配事 景気や生活費の減収、老後や将来の不安！女性は広範囲！

- ・ストレスの原因や心配事の内容は、トータルで見ると「仕事や学業のこと」をあげた者の割合(複数回答以下同 37.7%)が最も高い。かつてなら将来設計的な項目が挙がると思われるが、現実そのもの(現状設計)についてがトップに上げられ、また、「景気や生活費、収入が減る」が第4位(34.6%)になるなど、長引くデフレ不況で失業や就職難や就職活動の悪化などへの不安をリアルに心配している様子が窺える。そして、少子高齢社会も現実となりさらに進捗するという考えもあるようで「老後や将来の不安(34.6%)」「家族の健康や生活上の問題(31.7%)」が上位にランクしている。
- ・男女別で見ると、男性は、仕事や職場など勤労生活部分にストレスの原因や心配事を持っているようだが、女性は「老後の生活設計」や「家族の健康」など多様な生活部分にストレスの原因や心配事を抱えている。「多忙さ」がストレスにつながるという割合が第7位に上がっているが、現代社会の象徴的な事象ではなかろうか。

* 黄色枠は女性が、薄青色枠は男性が強く反応

2. 男女別ノストレスの原因や心配事(MA)									
	ストレス内容	計	男性	女性		ストレス内容	計	男性	女性
1位	仕事や学業のこと	37.7	49.6	25.7	13位	収入や教育の格差	12.0	12.8	11.2
2位	自分の健康	37.6	35.9	39.4	14位	介護	11.4	9.6	13.3
3位	老後や将来の不安	35.2	31.9	38.5	15位	友人との人間関係	10.6	7.5	13.6
4位	景気や生活費、収入が減る	34.6	33.9	35.3	16位	犯罪や防犯	10.6	8.5	12.6
5位	家族の健康や生活上の問題	31.7	26.5	37.0	17位	就職難	10.2	11.4	9.1
6位	職場・学校・地域の人間関係	26.4	28.7	24.0	18位	事故・災害	10.1	10.3	9.8
7位	日常の多忙さ	20.2	19.0	21.4	19位	失業や倒産	8.4	10.9	5.9
8位	貯蓄や資産の目減り	19.9	15.7	24.2	20位	食事バランスの乱れ	8.1	6.2	10.0
9位	子どもの保育や教育	17.4	12.6	22.4	21位	環境問題	7.2	6.1	8.4
10位	他人の非常識な言動	17.0	16.1	17.9	22位	情報量の多さ	5.4	4.1	6.8
11位	家庭内の人間関係	14.6	10.5	18.8	23位	騒音・悪臭などの公害	5.0	5.1	4.9
12位	住宅のこと	14.2	11.6	16.8	24位	特にない	3.8	5.0	2.7



3. 性別・年齢層別の「ストレスの原因や心配事」

性・年齢世代別にそれぞれの「ストレスの原因や心配事」をみる

◆ 中年・中高年・高齢者／男性のストレスの原因や心配事 「職場／景気／家庭／老後や将来の不安」

中年(35～49歳)のストレスの原因や心配事をみると、第一位は「仕事や学業のこと(人間関係以外)」、続いてその仕事に大きく関係する「景気や生活費、収入が減る」や「職場・学校・地域の人間関係」が30%以上でかなりの回答率の高さでマークされる。

中高年(50～64歳)では、もちろん職場のことはストレスの大きな原因としているが、定年年齢が引っかけようになり、「自分の健康」「老後や将来の不安」が第一位、二位となる。

高齢者(65～74歳)は「じぶんの健康」が第一位であるが、家族の動向にストレスを感じるようになっていく。

	中年・中高年・高齢者の男性(MA)	35～49歳	50～64歳	65～74歳
1位	仕事や学業のこと(人間関係以外)	61.8	47.4	9.8
2位	景気や生活費、収入が減る	41.9	44.0	32.1
3位	職場・学校・地域の人間関係	35.8	23.7	6.3
4位	自分の健康	29.3	48.3	62.5
5位	老後や将来の不安	26.4	47.8	43.8
6位	子どもの保育や教育	26.4	12.9	3.6
7位	家族の健康や生活上の問題	25.6	34.9	42.9
8位	日常の多忙さ	23.2	14.2	7.1
9位	収入や教育の格差	17.9	14.7	6.3
10位	他人の非常識な言動	15.0	15.1	17.0
11位	貯蓄や資産の目減り	13.8	22.0	22.3
12位	住宅のこと	13.8	15.1	9.8
13位	失業や倒産	12.2	17.2	5.4
14位	家庭内の人間関係	11.8	8.2	8.9
15位	介護	10.6	19.0	10.7

◆ 中年・中高年・高齢者／女性のストレスの原因や心配事 「子供／景気／健康」

中年女性(35～49歳)のストレスの原因や心配事は、第一位に「子どもの保育や教育」、第三位に「家族の健康や生活上の問題」が上がるなど家庭そのものがストレスの原因になっている。

中高年女性(50～64歳)では「老後や将来の不安」(50.8%)が第一位に上がっている。そのストレスは男性の中高年より早い。

高齢者女性(65～74歳)となると、何よりも「自分の健康」がストレスの原因や心配事としてあがってくる。

概ね中年以上の女性は家庭のことに関するストレスが多い。

	中年・中高年・高齢者女性(MA)	35～49歳	50～64歳	65～74歳
1位	子どもの保育や教育	51.9	8.1	0.0
2位	景気や生活費、収入が減る	44.4	39.8	20.9
3位	家族の健康や生活上の問題	41.2	44.7	51.8
4位	老後や将来の不安	36.6	50.8	49.1
5位	自分の健康	33.3	49.6	61.8
6位	貯蓄や資産の目減り	28.4	31.3	22.7
7位	仕事や学業のこと(人間関係以外)	24.7	13.8	1.8
8位	職場・学校・地域の人間関係	23.5	17.5	0.9
9位	日常の多忙さ	23.0	18.7	11.8
10位	家庭内の人間関係	21.8	17.1	6.4
11位	他人の非常識な言動	19.8	17.1	13.6
12位	住宅のこと	18.1	22.4	10.9
13位	収入や教育の格差	17.3	8.9	2.7
14位	介護	10.7	25.2	18.2
15位	犯罪や防犯	10.3	10.6	17.3

◆ **ヤングアダルト世代(20～34歳)のストレスの原因や心配事** 「仕事・就職／景気／多忙／老後の不安」

ここでは、20～34歳をヤングアダルト世代と呼んでいるが、この世代のストレスの原因や心配事は、男女ともに第一位に「仕事や学業のこと(人間関係以外)」、第二位に「職場・学校・地域の人間関係」など現実の目の前のことに悩みや心配事があるとしている。しかも、第三位に「景気や生活費、収入が減る」が上っており、日本の経済や景気の動向に一喜一憂していることがうかがわれる。

また、特徴的なのが「日常の多忙さ」が男性は第4位の25.4%、女性第6位の25.6%にランクされていることだ。この世代は年齢的にいっても仕事、趣味、通勤通学、そして家族や友人との付き合いなど生活活動範囲は広範囲で多面的なのであるが、ただ漠然として「日常の多忙さ」がストレスの原因となっているとすると、また、この年齢層からして早くも「老後や将来の不安」がストレスの原因となっているが、それは情報社会という新しい社会特有の新社会現象といってもおかしくない。

男性ヤングアダルト 20～34歳			女性ヤングアダルト 20～34歳		
1位	仕事や学業のこと(人間関係以外)	61.5	1位	仕事や学業のこと(人間関係以外)	44.5
2位	職場・学校・地域の人間関係	36.9	2位	職場・学校・地域の人間関係	37.0
3位	景気や生活費、収入が減る	26.2	3位	景気や生活費、収入が減る	35.7
4位	日常の多忙さ	25.4	4位	自分の健康	30.4
5位	自分の健康	24.2	5位	老後や将来の不安	26.0
6位	老後や将来の不安	23.8	6位	日常の多忙さ	25.6
7位	他人の非常識な言動	20.1	7位	家族の健康や生活上の問題	25.1
8位	就職難	19.7	8位	子どもの保育や教育	23.3
9位	家族の健康や生活上の問題	18.9	9位	家庭内の人間関係	22.5
10位	貯蓄や資産の目減り	13.1	10位	他人の非常識な言動	19.8

◆ **ヤング・若者世代(13～19歳)のストレスの原因や心配事(13～19歳)** 「仕事／多忙／友人関係」

ヤング・若者世代(13～19歳)は、昔から自分の身の回りのことが気になりストレスの原因や心配事となると言われてきた。今回の調査でも同様の回答を得ているが、気になるのは「友人との人間関係」「日常の多忙さ」が男女ともに上位に挙がっていることである。

この世代は、携帯電話世代といってもよく、人とのコミュニケーションがメールや電話で成立する世代であり、受動的な人との交流になりがちである。自分の時間も友人の行動に左右されてしまう。しかしそれを拒否すると友人との人間関係が悪くなる。ネット社会のストレスをこの世代がいち早く感じているようだ。

男性ヤング・若者世代(13～19歳)			女性ヤング・若者世代(13～19歳)		
1位	仕事や学業のこと(人間関係以外)	36.1	1位	仕事や学業のこと(人間関係以外)	48.5
2位	職場・学校・地域の人間関係	27.8	2位	友人との人間関係	45.6
3位	友人との人間関係	19.4	3位	職場・学校・地域の人間関係	44.1
4位	自分の健康	16.7	4位	日常の多忙さ	26.5
5位	日常の多忙さ	16.7	5位	老後や将来の不安	25.0

Ⅲ・経済的なゆとりについて

かつては「一億総中流」と言われたが、いつの間にかその中流層が抜けてしまった

国税庁調査で「所得階層別給与所得者数の推移」(単位:千人)を見ると、所得階層の推移では、1999年以降、年間所得が400万円以下及び2000万円以上の階層の給与所得者が増加する一方で中間階層では給与所得者が減少している。「年収300～600万円(ロウアーミドル)」が約40%、その下の「300万円以下(ロウアー)」も約40%。つまり国民の8割が年収600万円以下になっている。かつては「一億総中流」と言われ、国民の大多数が自分は中流階級に属していると考えていたが、いつの間にかその中流層が抜けてしまった。「国民が格差のない社会を求めている」というが、現実には日本はそういう方向に進んでいる。国民は文句も言わずに自衛してひたすら財布の紐を締めている。

1. **経済的なゆとり** 約7割がゆとりなしの経済生活をしているが、年齢層で大きな差異がある

・現在の生活において「経済的なゆとり」があるのかどうか聞いてみたところ、トータルでは「あまりゆとりがない」と答えた割合は49.7%でほぼ半数となった。「ゆとりはない」と明快に答えたのは22.6%にもなっているが、「ややゆとりがある」(25.7%)より若干低い数字となっている。

・全体的に「経済的ゆとり無し」(「あまりゆとりはない」プラス「ゆとりはない」)とするものの割合は70%強となっており、かなりの人たちが経済的な苦勞をしているようだ。中でも「男性35～49歳」は78.9%で8割近くを占めている。

・経済的にゆとりが比較的ありそうなのが「女性65～74歳」の女性高齢者層だ。オレオレ詐欺や金融商品と取引のターゲットになっている。

1. 経済的なゆとり				
	ゆとりがある	ややゆとりがある	あまりゆとりはない	ゆとりはない
TOTAL	2.1	25.7	49.7	22.6
男性 計	2.3	23.4	50.1	24.2
女性 計	1.9	28.0	49.2	20.9
男性 20～34歳	2.0	24.2	56.1	17.6
男性 35～49歳	0.8	20.3	49.2	29.7
男性 50～64歳	1.7	22.0	45.7	30.6
男性 65～74歳	2.7	26.8	50.0	20.5
女性 20～34歳	0.9	30.0	48.9	20.3
女性 35～49歳	1.2	19.3	52.7	26.7
女性 50～64歳	2.4	27.6	48.0	22
女性 65～74歳	2.7	34.5	46.4	16.4

2. **収入満足度** 「やや不満」が37.1%、「不満」が25.7%。不満たらたらの収入状況

日本経済新聞「2010年冬のボーナス最終集計調査(対象625社)」で、その税込支給額は72万8900円で3年ぶり増えたが、その支給額はIT(情報技術)バブル崩壊後の02年を下回り、20年前の水準だった。冬のボーナス支給額もそうだが、学卒内定の悪化が続く中での初任給も20年前からほとんど上がっていないというサラリーマンの収入環境がこの平成時代の20年間続く。年功序列も実力賃金体系もままならない現在の賃金体系が横たわっている。本アンケート調査をみても収入環境は良くない。収入のある人たちに現在の収入に対する満足度を聞いてみた。

・収入ある人たちトータル全体での平均をみると「やや不満」が37.1%、「不満」が25.7%で不満と思っているのは計62.9%にもなっている。それに対して「満足」は4.1%、「やや満足」は19%とかなり低

い回答率になっている。女性より男性のほうが不満度は大きい。

・性・年齢別で不満度が高い(「不満である(やや不満プラス不満)」でみる)のは、男性20～34歳という若い世代が70.6%と最も高く、中高年(50～64歳)の68.4%、中年(35～49歳)68.4%と続く。女性も不満度は高く中高年では60%を超えている。

2. 現在の収入に対する満足度(収入のある者のみ)						
	調査数	満足している	やや満足している	やや不満	不満	なんともいえない
TOTAL	1392	4.1	19.0	37.1	25.8	14.1
男性 計	791	2.9	16.9	38.1	29.3	12.8
女性 計	601	5.7	21.6	35.8	21.1	15.8
男性 20～34 歳	211	2.4	13.3	40.3	30.3	13.7
男性 35～49 歳	245	2	20	36.7	31.0	10.2
男性 50～64 歳	221	5	14.9	39.4	29.0	11.8
男性 65～74 歳	105	1	21.9	33.3	23.8	20
女性 20～34 歳	158	5.1	19.6	34.2	25.9	15.2
女性 35～49 歳	166	6.6	19.3	36.7	24.7	12.7
女性 50～64 歳	169	6.5	21.9	37.3	18.9	15.4
女性 65～74 歳	89	4.5	23.6	36	12.4	23.6

3. 収入と支出のバランス 「支出が収入を上回る」が28.9%

家計は収入と支出のバランスをどう取るのかが生活を続けるうえで重要な課題である。現在の収入に大きな不満を持つが、支出との関係はどうなっているのか。

全体平均でみると「収入と支出は同じくらい」とするのが5割でバランスをうまくとっているものが多いが、「支出が収入を上回る」は約3割の28.9%である。この数年間以上消費を抑制し節約に努めてきている中、現在の収入に強い不満が出てくるのも当然だろう。

性・年齢別でみると、中高年男性や高齢男性において「支出が収入を上回る」比率は他の年齢世代に比べると高くなっている。ヤングアダルト世代(20～34歳)については、消費す籠り世代といわれるように支出を抑えることを最重視するせいか男女ともに「収入が支出を上回る」割合は20%台と高い。

子育てなど家庭の事情で支出が増える世代と若い世代との差はあるが、消費生活の価値観の違いもそこにはありそうだ。

3. 収入と支出のバランス				
	調査数	収入が支出を上回る	収入と支出は同じくらい	支出が収入を上回る
TOTAL	1392	20.4	50.7	28.9
男性 20～34 歳	211	28.0	57.8	14.2
男性 35～49 歳	245	18.8	51.0	30.2
男性 50～64 歳	221	15.8	45.2	38.9
男性 65～74 歳	105	10.5	55.2	34.3
女性 20～34 歳	158	31.6	49.4	19.0
女性 35～49 歳	166	20.5	49.4	30.1
女性 50～64 歳	169	17.8	49.1	33.1
女性 65～74 歳	89	12.4	46.1	41.6

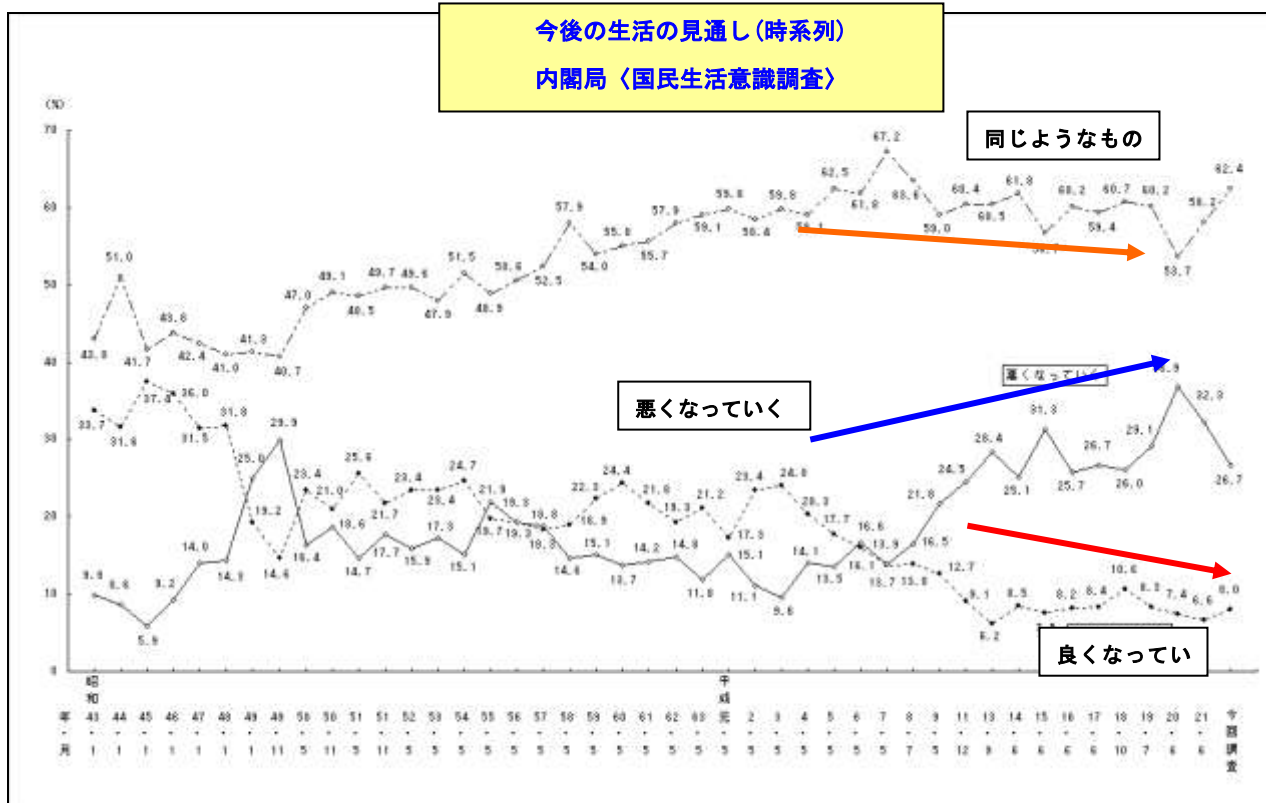
4. 今後の収入の増減 デフレに振回され疲労する生活。期待できない収入増。マンネリ化の増幅に

現在の収入に対する満足度を聞くと不満が7割を超え、また、実際その不満な収入を前提に支出とどう折り合いをつけているのかを聞くと5割の人が「収入と支出が同じ」としている。節約したり安売りを選んだり消費に気を使った生活をしていることがうかがえる。消費節約に疲れていることもあり、当然のこととして収入アップが期待される。

ここで、「今後の収入の増減」を聞いてみた。「減っていくと思う」と回答したのは全体で31.6%にもなっており、「増えていくと思う」はその半数である。年齢層が上がれば上がるほど「減っていくと思う」比率は高まっている。この20年間の景気や収入環境の低迷はあまりにも長すぎた。中高年にはもはや日本の経済の回復力を期待する人はいないのかもしれない。

今後の生活見通しについて、国民生活意識調査で毎年行われているが、そのデータで見ても長期的にはITバブル(平成2年)以降、今後の生活の見通しは、「悪くなっていく」とする人が増加し続けている。

4. 今後の収入の増減				
	調査数	増えていくと思う	あまり変わらない	減っていくと思う
TOTAL	1392	15.7	52.7	31.6
男性 20～34 歳	211	37.4	54.5	8.1
男性 35～49 歳	245	17.6	57.1	25.3
男性 50～64 歳	221	7.2	43.0	49.8
男性 65～74 歳	105	1.0	41.0	58.1
女性 20～34 歳	158	20.9	65.2	13.9
女性 35～49 歳	166	15.1	63.3	21.7
女性 50～64 歳	169	5.3	49.7	45.0
女性 65～74 歳	89	1.1	38.2	60.7



IV・現在の日本社会について

大不満・ストレスいっぱいの「情報化社会」の真っ只中にある日本

1. 現在の「社会」の満足度

現在の「社会」の満足度を聞いてみると、トータルとして「不満度(やや不満プラス不満)」が圧倒的の71.8%となっている。

「満足度(満足プラスやや満足)」は20%

現在の「社会」満足度	満足	やや満足	やや不満	不満
1800 サンプルトータル	0.9	27.3	57.1	14.7

台の28.2%である。内閣の支持率20%台を切ると倒れるといわれるが、日本の満足度はすれすれ20%台を維持している。日本社会崩壊までとは言わないが満足度が低い中どう生きるか、個人個人の考えや振る舞いが自己責任として問われる社会となったようだ。

2. 今の社会は(MA)は

今の社会はどんな社会なのか聞いてみた。

トップスリーは、「格差が広がっている」(87.8%)、「人に対する気づかいが希薄になっている」(85.4%)、「時間に追われる多忙な社会になっている」(81.2%)であるが、この手の調査では、「格差」や「気遣い」が上位に上がってくるのがいつものパターンだが、「時間に追われる多忙な社会になっている」という時間や多忙といったキーワードに強く反応するのは珍しい。ITデジタル化で情報は大量にしかも簡単に発信され受信されるようになりそれがビジネスになることをほとんどの人が認識するようになったことを証明している。それは、現代社会が明らかに工業社会から情報社会に大きく転換しつつあることでもあるが、この社会に生きる人たちの生活価値観や生活行動を大きく変えている。

今の社会は(MA)ノトータル			A)そう思う	B)ややそう思う	C)あまりそう思わない	D)そう思わない	わからない
1800 サンプル		A+B					
1位	a)格差が広がっている	87.8	41.0	46.8	7.9	1.2	3.1
2位	e)人に対する気づかいが希薄になっている	85.4	36.8	48.6	11.1	1.2	2.3
3位	f)時間に追われる多忙な社会になっている	81.2	33.4	47.8	14.1	2.1	2.6
4位	d)老いるのがますます辛くなっている	80.4	35.3	45.1	13.9	2.4	3.2
5位	g)子どもを産み育てるのが難しくなっている	79.9	36.6	43.3	14.0	2.9	3.2
6位	i)夢や将来の展望が持ちにくくなっている	72.4	24.4	48.0	20.1	4.7	2.8
7位	l)、弱者が報われなくなっている	71.2	25.1	46.1	20.7	4.8	3.4
8位	h)パソコンやケータイが使いこなせないと生きていけない	70.1	28.3	41.8	21.0	6.7	2.2
9位	j)お金がすべての世の中になっている	68.7	22.9	45.8	23.1	5.7	2.4
10位	c)安全や安心にお金をかけるようになっている	66.8	14.7	52.1	24.1	6.4	2.8
11位	k)個々人の個性が失われている	53.9	13.9	40.0	34.9	7.6	3.6
12位	b)規則やルール優先で個人の自由が失われている	38.7	8.8	29.9	45.2	12.6	3.5



子供手当ではどう使われたのか！
「何に使ったかわからない」が33.7%という実態

少子化が進展する中で、安心して子育てをできる環境を整備することが喫緊の課題となっているなか、2010年度（今年）の国の予算（4月1日より施行）で、民主党政権は子供手当で支給という手を打ち出した。子育て世帯からは、子育てや教育にお金がかかるので、経済面での支援を求める声が多く、子育てを未来への投資として、次代を担う子どもの健やかな育ちを社会全体で応援するという観点から実施された。

子ども手当法は、15歳以下の子どもの保護者に対し手当（金銭）を支給している。支給額は、初年度のみ毎月1万3千円、次年度以降は現在のところ毎月2万6千円を支給する予定であったが、財源問題により満額支給を断念すると政府発表もありまだ未決着である。ここ連日、子供手当が出ていのに給食費も保育園費も払わないという実態が明らかにされつつある。天引きされるかも知れない。その子供手当がどう使われたのか本アンケート調査では緊急テーマとして「子ども手当の使いみち(MA)」という質問項目を加えた。その結果を見てみよう。調査対象(1800)のうち15歳以下の子供がいるのは751サンプルで42%である。

トータルで見ると「子どものために使った」「貯金した」のが同率の29.3%となっているが、トップは「何に使ったかわからない」が33.7%となっている。「生活費に使った」という人が約2割強、「何に使ったかわからない」が33.7%もあり、子供手当については、別途収入的な感覚で受け止められているようだ。手当支給対象については、子供の年齢（幼児、小学生・中学生など）や世帯の所得制限などを考慮するといった論議があいまいになっていたが、その通りあいまいな使われ方がされている。性・年齢別でみると「子供ののために使った」とする回答率が高かったのは、女性（20～34歳）が45.1%に、また男性（35～49歳）の39.4%となっている。少子化対策といわれるが何か方向が間違っているといことが明らかになった。

子ども手当の使いみち(MA)／15歳以下の子供がいる者対象					
	調査数	貯金した	子どものために使った	生活費に使った	何に使ったかわからない
TOTAL	751	29.3	29.3	23.0	33.7
男性 計	379	26.6	27.2	19.8	37.2
女性 計	372	32.0	31.5	26.3	30.1
男性 13～19歳	72	1.4	0.0	1.4	97.2
男性 20～34歳	61	32.8	27.9	19.7	39.3
男性 35～49歳	188	34.6	39.4	25.0	15.4
男性 50～64歳	46	30.4	26.1	30.4	17.4
男性 65～74歳	12	8.3	0.0	8.3	83.3
女性 13～19歳	68	0.0	0.0	0.0	100.0
女性 20～34歳	82	36.6	45.1	30.5	20.7
女性 35～49歳	185	44.9	40.5	37.3	2.2
女性 50～64歳	21	28.6	23.8	14.3	38.1
女性 65～74歳	16	0.0	0.0	6.3	93.8

ポイント
調査 2

エコポイントは誰が利用したのか？
エコポイント利用状況(MA) は？

リーマン・ショック後の深刻な不況から抜け出するために、政府は 09 年(昨年)4 月から、それぞれ対象商品が限定されているが、自動車購入には「エコカー補助制度」、家電製品には「家電のエコポイント」、住宅には「省エネ住宅エコポイント制度」を導入した。基本的には単年度の景気対策であったため、「エコカー補助制度」は今年の9月に、「家電のエコポイント」は12月に打ち切れ、「住宅ポイント」はポイント対象が限定され来年 6 月まで延期される。

商況を見ると、昨年末からの「エコカー補助制度」や「家電のエコポイント」の導入で、今年 9 月までの自動車販売額や 11 月までの家電の販売額は、前年を大きく上回り、2010 年の個人消費の回復を支え、経済実質成長率は 4%台に上昇している。昨年4月、政府の緊急経済対策の目玉施策としては良い効果があったという見解が多い。住宅エコポイントは地球温暖化対策の推進及び経済の活性化を図ることを目的として、エコ住宅を新築された方やエコリフォームをされた方に対して一定のポイントを発行し、これを使って様々な商品との交換や追加工事の費用に充当することができる制度だったが、制度もややこしくまたポイント対象がかなり限定されており期待効果はまだ出ていない。

全体的に前向きに捉えられてきたこのエコポイント・補助制度は実態としてどのように利用されたのかを本アンケートで確認してみた。薄型テレビやエアコン、冷蔵庫家電製品は、テレビのデジタル化を来年に控えていたことと今夏の猛暑が相乗し消費者の購入意欲が高まる中でのエコポイント制度の導入はエコポイント利用を促した。特に買い替え需要世帯でもある男性高齢者層や中高年女性層での利用率は、それぞれ 50%、40%を超えている。ヤングアダルト世代は、早くからこれらの家電製品に対応していることと一方で 2 台目三台目を購入するといった経済的余裕があるわけではないためエコポイント利用まで行き着かない状況があったものとみられる。住宅エコポイントやエコカーについては、金額も張ることでもあるしもと住宅や車の購入者は限られており、その上でのエコポイント利用だから調査では利用率は低い。

エコポイント利用状況(MA)					
	調査数	家電エコポイントを利用した	住宅エコポイントを利用した	エコカー減税を利用した	エコカー補助金を利用した
TOTAL	1800	37.2	0.8	6.7	6.3
男性 13～19 歳	72	6.9	1.4	1.4	1.4
男性 20～34 歳	244	25.8	1.2	3.7	4.1
男性 35～49 歳	246	42.7	0.8	9.8	8.1
男性 50～64 歳	232	44.4	0.9	9.9	8.2
男性 65～74 歳	112	57.1	1.8	8.0	9.8
女性 13～19 歳	68	11.8	0	1.5	0
女性 20～34 歳	227	22.9	0.9	3.5	4.8
女性 35～49 歳	243	40.3	0.4	7.8	7.4
女性 50～64 歳	246	48.8	0.4	8.5	7.7
女性 65～74 歳	110	46.4	0	4.5	3.6

以上 [第二回レポート]了